



RAILWAY PHOTOGRAPHY & POETRY CONTEST 2017

鉄道写真詩コンテスト入賞作品集
写真と詩で伝える鉄道の魅力



真岡鐵道 天矢場・茂木間

春夏秋冬
水車はいつも
同じところを
コトコト廻り
汽車はガタゴト
進んでいく

走って走って
走り抜けて
見える景色はどんなだろう

入選
武藤彩香（栃木県）
「汽車と水車」



道南いさりび鉄道(当時江差線)金谷駅

あなたがい時間が流れている

入選
鈴木啓公（東京都）
「おばちゃんの城」



飯田線 向市場駅

北国の朝
貨車を改造した無人駆の待合室に
おばちゃんがいた
焚かれたストーブのそばで
おばちゃんは編み物をしながら
切符を売つている

手作りの座布団 人形に 折り紙の飾り
そこには おばちゃんが創り出した世界が広がつていた
カタコトン カタコトン
貨物列車が軽快な音を立てて通過してゆく
北国 の待合室にはきょうも
ゆつたりとした
あなたの時間が流れている

コトコト
ガタンゴトン
水車は廻り、汽車は往く
走って走って
走り抜けて
見える景色はどんなだろう

入選
藤田乃愛（静岡県）
「閉まる」

◇ 米屋こうじ Yoneya Koji
鉄道写真家



写真に写された世界を、詩がどのように広げるのであるのか?詩に込められた物語を、写真がどのような印象を導くのか?本コンテストの審査は、画期的で楽しい作業でした。僕が写真を見る時に注意する点として「時間の流れが写っているか」という項目があります。過去から未來へ一方的に流れる時間のなかから「一瞬」を切り取って写し込むのが写真ですが、今回入賞・入選した作品のなかには、作者がその場所に立ち、シャッターを切るまでの経緯を含めた「時間の流れ」が感じられる写真が多く選ばされました。

なかでも、街のビル間に沈む夕陽を捉えた小池田さんの「トワイライト」は、夕刻の一瞬を、見事な構図と露出で捉えた素晴らしい一枚です。偶然出会った場面のように見えますが、太陽の動きを觀察し、何度もトイライしたのではないかでしょうか。そんな作者が体感した時間の流れを感じられます。異空間へ導いてくれるような「詩」も独創的で、賞に選びました。

◇ 水無田氣流 Minashita Kiri
詩人・社会学者



今回、改めて言葉の強度と写真の印象との組み合わせについて、考えさせられました。「写真詩」として成功している作品は、やはり写真と詩が新たな化学反応を起こしているように思いました。

圧倒的に視角に訴えかける鉄道写真には、あまりごてごてとした明喻をつけるのではなく、隠喻や換喻表現のほうが、作品の空気感には似合うようです。

私が賞に選んだ志波さんの「シグナル」は、初連・終連の末尾が脚韻を踏んでいるため、引き締まった印象の詩で、色彩表現と雨と音響の対比が鮮やかに描写されているなど、極めて高濃度な作品となっていました。

入選作の中では藤田さん「閉まる。」が、削ぎ落とした表現ゆえの抒情があり、印象に残りました。

講評

国土交通省鉄道局長賞



津軽鉄道 津軽飯詰・毬沙門間

乗客は 知つているだろうか
列車が白き龍に巻かれていることを
運転士が白き龍と格闘していることを
ただ見つめているだけだろうか
揺れる車体に身をゆだね
車窓の白い闇を

「白龍」

佐々木博光（青森県）

米屋こうじ賞



JR京都線 高槻駅

餡色の刻（とき）が街をつつみこむ
ひとすじの流れ星とともに
タイムマシンが現れる
僕たちは いつでも 時を渡ろう

「トワイライト」

小池田和恵（大阪府）

鉄道写真詩とは

鉄道写真詩とは、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の持つ魅力を表現するものです。
普段乗り慣れた鉄道、旅先での鉄道、その時々出会った鉄道の表情とともに作者の心情が伝わってきます。

The Network for Transport and Environment "ecotran"
一般社団法人交通環境整備ネットワーク

水無田気流賞



南海電気鉄道高野線 紀見峠・天見間

麦わら帽子を忘れずに
水筒ひさげ線路端
スケッチブックに描く夏
やがて汽車の煙が見えてきた
機関士さんに手を振れば
ボーッと汽笛でお返事を
ガタンゴトンと去り行く汽車
少年は再び夏を書き始めると
遠ざかっていく汽笛の音に
静かに耳を傾けながら

エコトラン賞



土佐くろしお鉄道 西大方駅

深山の驟雨が止んだ
シゲナルを映した葉は緑
横圧に鋼鉄が鳴く
神隠しの唄を聞いたのか
赤い灯りが揺れる葉をぎらりと舐め行く
隧道、またわずかに霧雨が降り出した
鏽びた柵の向こうで竹林がざわめく
古城を望む、ここは異人の下りた郷

「シグナル」 志波英明（大阪府）

「最終列車」 千葉 洋（高知県）

国土交通省鉄道局後援 一般社団法人交通環境整備ネットワーク主催
写真と詩で伝える鉄道の魅力 鉄道写真詩コンテスト2017

協力 鉄道博物館・東武博物館・日本旅行・交通新聞社・関東交通印刷
鉄道×文学の新しい表現に挑戦! あなたの撮った鉄道の写真にあなたの詩を添えて

作品は平成29年7月1日から9月30日の間、HP (<http://ecotran.or.jp>)の応募フォームより受付を行いました。
多数のご応募をいただき、ありがとうございました。

応募規定

- ①写真的撮影及び詩作は同一人であって、未発表のものに限ります。
- ②応募点数は一人3点までとします。3点を超えて応募された場合は先の3点を審査対象とします。
- ③写真は、鉄道を題材としたものであって単写真に限ります（組写真は不可）。
- 銀塩写真、デジタル写真、カラー、モノクロの別は問いません。
- 画像ファイルは、JPEG形式とし、ファイルサイズは5MB以内（大きい画像は5MB以内に圧縮）とします。
- 画像ファイルとは、デジタルカメラやスマートフォンで撮影した画像データ及びフィルムカメラで撮影し、スキャナで作成した画像データのファイルを指します。
- ④詩は、自由詩、散文詩のいずれも可。一行詩から、20行未満の詩であって、文字数は400字以内とします。

入選 大場正明（宮城県）

「汽車と少年」



磐越西線 喜多方・山都間

麦わら帽子を忘れて
水筒ひさげ線路端
スケッチブックに描く夏
やがて汽車の煙が見えてきた
機関士さんに手を振れば
ボーッと汽笛でお返事を
ガタンゴトンと去り行く汽車
少年は再び夏を書き始めると
遠ざかっていく汽笛の音に
静かに耳を傾けながら

入選 茂木夕夏（北海道）

「いつも」



根室本線

いつも、乗りたがっていた
いつも、手を振っていた
いつも、見ていた
いつも、見ていた
そんな鉄道に今日は乗れたね。
いつも、笑いあって
いつも、一緒にいて
いつも、喧嘩している
姉弟だけど
鉄道に乗つて
色々な景色を見てると
今日も良い一日で終えられそう。

入選 中本則昭（兵庫県）

「遙かなる日々」



明治村

悠久の谷を隔て
蘇る記憶
曖昧な映像に
ときおり見える
懐かしき友の笑顔
旅にでよう
きみと出会ったあの頃に
また出会うために

入選 山崎功（茨城県）

「秋」



小海線 小淵沢・甲斐小泉間

柿がひとつ
列車とこんなにちわ
柿がひとつ
甲斐駒は雲にかくれんば
明日は天気が崩れるのだろうか?
吹いてくる風に
少しずつ近づいてくる、
厳しい冬の気配を感じられる
秋の一日

入選 南輝明（神奈川県）

「坂の上の電停で」



函館市電 青柳町・谷地頭間

ガタゴトと音を立てて市電が
上ってきた
降りてきた
あの日の君
待っていた
あの日の僕
ガタゴトと音を立てて市電が
下がっていった
去つていった
あの日の君
去つていった
あの日の僕
残された現在の僕は
そつと
シャッターを切る